Japanese Association for Religious Studies

ところで、包摂主義的立場と相対主義的立場のいずれの立場においても他宗教との対話は重視されるが、イスラーム至上主義の立場に立てば他の諸宗教はイスラームを頂点とした階層的宗教世界の階層図の中ではイスラームよりも下位のものと看做されてしまう。この場合には対等な立場での宗教間対話は成立しなくなってしまう。他方、相対主義的立場に立つならばなにゆえにイスラームを選び取ったのかを理論的に説明できない懐疑論に陥ってしまうことになる。同じことはイスラーム以外の諸宗教についても言えることである。それぞれの立場に固執する場合には結局は自宗教至上主義に行き着いてしまい、その結果は排他主義になり宗教的非寛容に陥ることになる。宗教多元主義に立ちながら自宗教至上主義を回避し、他方相対主義的懐疑論を回避することが宗教間対話を実りあるものとするためには大切な点である。イスラームにおいてこのような実りある宗教間対話を可能ならしめる相対主義的宗教多元論の枠組みを創り上げている思想は「存在一性論」(wahdat al-wujud) 学派の思想であると思う。この学派の思想では唯一の真実在者のみが実在し、それ以外の諸存在者は唯一の真実在者の影の存在とされる。この影なる諸存在者は唯一の真実在者の自己顕現・自己分節の結果として出現しているとされている。角度をかえて見れば、唯一の真実在者とは原初の自己顕現者・自己分節者ともいえる存在なのである。この原初の自己分節者を一者ともムハンマド的実在とも呼ぶ。それは唯一の真実在者の本質を知る存在という意味で宇宙論的預言者ということになる。したがって、預言者性は宇宙の創造の始まりの時点で存在しているのである。この宇宙論的預言者は唯一の真実在者の本質について最も近くにいて得られる認識を持つ。このような唯一の真実在者への近さを「ワラーヤ」(近接性) と呼ぶ。このような「ワラーヤ」を備えた預言者が各時代、各民族にそれぞれ預言者として出現するとされるのである。それゆえ、かの宇宙論的ムハンマド的真実在がアブラハムとして現れ、モーセとして現れ、イエスとして現れ、ムハンマドとして現れたというのである。彼らは唯一の真実在者に限りなく近く、親密な関係を持つ存在である。近現代になると存在一性論の「ワラーヤ」論はアブラハム系統の宗教の枠を越えて仏教、儒教などの文化の中でも真実在者に近づくことが出来た人々が現れていると考えるようになる。このようにして、イスラームにおいては真実在者への近さという概念を基礎に諸宗教を肯定し、宗教間対話を実践しようとしている。

パネルの主旨とまとめ

八巻和彦

一般に宗教においては、社会集団としての信仰と、それを導く指導者の個人としての信仰のあり方が区別されつつも、極めて緊密に結びついている。指導者の信仰が他の信者たちの模範とされるからである。逆に、指導者は自己の信仰のあり方を、自己が率いる集団の信仰をいかなるものとするかという観点か

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

らの負荷のなかで規定されざるえない。また、以上のことを前提にした上で、宗教集団間の対立の場合も、一般の集団間での対立の場合と同様に、その集団同士の本質に関わる係争点を解決することを目的として争う場合(a)と、係争点は存在するものの、その解決を目的とするのではなく、係争を顕在化することで自身の集団内部を固めることを目的とする場合(b)という、二つのケースが存在する。

矢内氏の報告したノージャンのギベールは、上記の(b)のケースであり、橋川氏の報告したベッコスは、上記の(a)と(b)とが政治状況のなかで複合したケースであろう。もちろん(b)のケースであっても、人と情報の移動がグローバル化している現代では楽観は許されない。かつての十字軍のように、その集団の中で培われた、他の宗教に対する偏見をもって、実際に他宗教に対して暴力的に行動を起こすことがありうるからである。

末期ビザンツ帝国における高位聖職者ベッコスのfilioqueをめぐる「転向」は、悲劇的ではあったものの、上に述べたような視点からとらえなおすと、そのプロセスに宗教間対話への可能性を示す具体相を見出すこともできそうである。

比留間氏の報告したピコの試みは、万教のキリスト教への帰一を理論的に模索するものであり、ノージャンのギベールと比較するとはるかにリベラルで、ルネサンスの時代精神の現われと言えよう。しかし、他の宗教を自己の宗教に包摂するという方向は、宗教信仰の現場においては実際的ではないであろう。

やはり、先ずはわれわれの研究テーマが掲げているように、「対話」を深めることが重要だろう。しかし、報告者の松本氏も指摘したように、対話の好きな者同士の単なる対話に終わってはならず、むしろ対話を嫌う者が対話に乗り出さざるをえないような事態を明らかにすることが重要である。そのための重要な足がかりとなるものは、松本氏が提示したイスラームにおける存在一性論学派の思想であろう。これは、唯一の真実在者のみが実在し、他の諸存在者はこれの影であるととらえるので、人間の理解はいずれもこの真実在者の直接把握ではなく、それへの「近さ」の表現とみなされる。そして、この「近さ」・ワラーヤを備える預言者は、ムハンマド以外に他の宗教にも存在しうるということになる。ここから「信仰には多様な表現が可能である」という立場が開かれうるのである。

このイスラームにおける絶対一元論から導かれる思想とよく似たものが、一五世紀ローマカトリック教会の中にも見出される。それはニコラウス・クザーヌス(Nicolaus Cusanus)の"De pace fidei"(信仰の平和)という著作に込められたものである。クザーヌスはDocta ignorantia(覚知的無知)の思想に立ちつつ、「信仰には多様な表現が可能である」ことを明言している。宗教の指導層がこのような事態を認識することは極めて重要である。さらに、この根本的事態をより深く指摘するものは、司馬氏がヴァレラの認知科学を仏教の立場から補強しつつ報告した「二重の仮象に陥る危険性」であろう。もし宗教の指導者たちがこれらの点を自覚しつつ信徒を導くならば、本稿の冒頭に記したような無用な抗争は回避され平和的な共存と相互理解が成立しうるであろう。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

フロアからテーマの本質に関わる質問を提出してくださった方々、そして二時間にわたるパネルに熱心に参加してくださった多くの方々に、改めて感謝申し上げる。

宗教とエコ・フィロソフィ
――東洋の宗教伝統を中心として――

代表者　渡辺章悟
コメンテータ・司会　吉田公平

ヒンドゥー聖地と環境問題

宮本久義

世界的な環境問題への取り組みの影響下、昨今インドにおいても環境問題に多大な注意が向けられるようになった。本発表は北インドのガンガー（ガンジス川）の流れるヒンドゥー教聖地ヴァーラーナスィー（別名バナーラス、ベナレス）を例として、その取り組みの過程を検討し、その特徴と問題点を探るものである。

ヒンドゥー教は本来自然に対する高い環境意識を持っていた。特に水に関する自然観にそれはよく表れている。インダス文明の時代からインドでは沐浴が重んじられていたと考えられ、またヴェーダ聖典の創造神話でしばしば説かれる原初の水あるいは海とは、あらゆるものを生み出す母胎（マトリックス）と考えられていた。さらに、ヒンドゥー教の思想や神話では、水の特性あるいは力を示すのにさまざまなアナロジーが使用されている。水が羊水や精液とのアナロジーとして語られるとき、それは限りない生産力を示している。牛乳とのアナロジ

NII-Electronic Library Service